

北欧における幼児の環境教育の特徴Ⅱ

——ノルウェー王国（ストード市）での視察を通して——

杉山 浩之*・高橋 泰道**

Characteristics of Environmental Education for Infant Children in Scandinavian Countries II:
Through the Investigation of Stord in Norway

Hiroyuki SUGIYAMA* and Taido TAKAHASHI**

はじめに

北欧諸国は世界的に見て福祉の先進国として確固たる地位を占めており、子どもの権利や障害者権利などを保障する社会としても世界をリードする国々である。さらに、自然享受権（スウェーデンの自然保護法では、「自然は全ての人のものであり、誰でも他人の所有の森や土地に入ってもよい、宅地以外なら他人の土地を歩いてもよい」とある）が認められた国としても有名であり、それを実現するために、享受される自然を保護する教育、即ち「環境教育」が行われている。また、子どもの権利条約（1989）では、「自然環境の尊重を育成すること」と規定されており、子どもの権利条約を世界で先駆けて教育に導入した北欧諸国が環境教育の先進国たる所以である。

スウェーデン王国は、森の妖精ムッレ中心に自然保護を子どもに語り体系的な環境教育の発祥の国である。森のムッレ教室は、現在フィンランド・ノルウェーを中心に、ウェールズ、イングランド、スコットランド、ロシア、韓国、日本などに広がっている。また、グリーンフ

ラッグ認証団体が推進する環境教育もスウェーデン発祥である。さらに、一般的な野外保育を中心とする野外就学前学校（2017年193校）も存在する。一方、スウェーデン王国の隣国であるノルウェー王国では、スウェーデンとは異なる独自の野外保育を展開してきた。そこで、本研究では、2018年9月に北欧のスウェーデン・ノルウェーの両国の就学前学校視察を基に、それらの環境教育の特徴を明らかにすることを目的とした。

なお、今回の調査報告は第一報に続いて、ノルウェーの視察報告を行う。

1 ノルウェー王国（ストード市）における幼児の環境教育

ノルウェーの「こども園保育要領」（Framework Plan for Kindergarten、2017施行）において、いわゆる「環境」領域は「自然・環境・テクノロジー」と「量・空間・形」の二分野に分かれている。前者の内容を詳しく見ると「生物多様性の探索」「一年を通しての野外体験」「自然現象や物理の法則の実験」「自然保護の基礎的理解」「動物の生態の理解」「人間のライフサイクルの理解」などが挙げられている。幼児期における環境教育は、日本と比較して、より深い

* 本学教授

** 島根県立大学

内容が扱われていることが分かる。

2 保育園での実践視察

(1) 野外保育中心のこども園

ヴィルヴェッテンこども園は、野外活動を通して「冒険への挑戦」「自由・時間・可能性の感覚」「創造性」「協働」「自然への好奇心」「運動技能」「安全確保と安心できる方法」「言語」を学ぶ機会を保障している。

毎日野外で保育を行い、昼食も当然野外で、調理が必ずあるという。子どもは1歳からナイフを使う訓練を始める。ナイフを使用することは人権であるという。これはノルウェーの風土や伝統も背景にしているともいえる。森の中では、海賊船を作り、化粧をして海賊ごっこを楽しむ。船が園庭にあり、フィヨルドに囲まれた海や湖も近くにあり、実際にボートに乗ることもある。以下は、視察に際して、メールで得た回答を元にしてしている。

1) 火の環境づくり 焚火は日常で、特に寒い日々には重要な役割を果たす。焚火やテントのオープンの周りに集まることは暖を取るとともに雰囲気づくりともなる。また、食事作りに火は不可欠である。子ども達は薪を積み、火をつけるところから参加する。子ども達が焚火の便利さを学ぶとともに、火に対する安全と慎重さを身につけることが大事である。

2) 親が保育活動の評価に参加する形態 こども園では、保護者との身近な連携がある。日常の送り迎えなどの際の会話では、様々なフィードバックがもらえる。また保護者との二者懇談では、より多くのフィードバックや評価をいただく。ビルベッテネこども園は自然保育に重点を置いており、そのためにこの園を選んだ保護

者が多い。子どもの声とともに保護者の意見も重要である。

3) 野外での動物飼育 園には動物はいないが、子どもたちが動物に接触する機会がないわけではない。農場を定期的に訪れたり、年に一度は鶏の卵をふ化させたり、こども園の周りは野鳥が豊富に見られる。またネズミや蝙蝠、ハリネズミやカエル、魚など、こども園の近くで子どもたちが触れ合うことのできる動物がいろいろいる。

4) 安全管理 安全であることはとても重要で、非常時にどのようにするべきかを示した防災訓練に関する計画もある。しかし、子どもたちがさまざまなことに挑戦し、達成感を得ることも重要である。自然の中での野外活動を通じて、子どもたちに身体的な遊びをもたらし、肉体的、社会的、知的、感情的な発達を刺激したいと考えている。自然の中で、子どもたちは人生に欠かせない経験をする。それは子どもたちが五感を使い、先の見えない、コントロールの利かない、驚くような、多様な、変化し、濡れて、冷たく、面白く、おかしく、不快で、気味悪く、危険でドキドキするような経験である。これらは子どもたちが熟練した大人になるうえで、とても重要で、必要不可欠である。そのためには子どもたちはナイフ、のこぎり、斧、釣り道具などを保育者とともに使い、火を囲み、木に登り、海で泳ぎ、ボートやカヌーに乗り、テントで寝る。重要なのは、保育者が安全な枠組みの中で、子どもたちに挑戦させることである。客観的な危険と主観的な危険を見分ける必要がある。ビルベッテネでは子どもたちがナイフの使い方を習得するのは人権となっている。

5) 保育内容への参画 子どもの声をどう反映するかという定まった方法があるわけではなく、大人が子どもをどのように見るかということである。これは大人の態度と見解が子どもの声に対して実際にどのように対応するかということである。これは保育者の応対とこども園の組織による。子どもの意見を反映するには、聞き取りと会話のための時間と空間が必要である。一日中子どもたちと柔らかに緊密な協力関係を築き、緩やかな計画のため子どもたちの意見を反映できる場がある。会話、観察、評価を通じて、子どもたちの声を獲得する。そして、子どもたちの観察や関心をもとにしたプロジェクトをよく行う。そしてそのプロジェクトは子どもたちが主体である。

(2) 一般的なこども園

スチューアストレーン農場こども園は、農場主の好意で農場の馬や羊に触れることができる。広い園庭に加えて農場主が持つ森も使用可能である。園庭では雨が降っても炭に火をつけ魚やジャガイモを焼くことが出来る。国からの保育施設枠組み計画の中の一つの項目に、「体、動き、食べ物と健康」という項目があり、環境教育はそこに関連している。例えば、食べ物はどこから来るのかなど、朝の集まりで話したりする。子どもたちと一緒にパン生地を作り、その際にはさまざまな種類の穀物の粉を使う。その後、子どもたちと一緒にパンを焼き、焼けたパンはうちに持ち帰りもする。保育者は子どもたちにとっての良い見本になるように心がけており、自然の中に物やゴミを捨てないように教えたり、人が使った跡を残さないようにして自然を使うようにしている。家庭菜園にも力を入れている。子どもたちとともに地域のゴミの収集場所の拠点へ行き、生ゴミから作られる腐葉土

を園に持ち帰り、それを家庭菜園に入れて種をまいている。子どもたちは種から芽が出て大きくなり、秋に収穫して食べられるようになるプロセスを体験することができる。以下は、視察に際して、メールで得た回答を元にしている。

1) 私たちのところでは、秋から冬にかけてよく焚火をする。もちろん（法律で定められた）9月15日から4月15日の間がほとんどであるが、グリルなども他の時期に利用可能である。外ではよくおかゆを作り、フィッシュケーキやチーズサンドイッチなども焚火で作る。たまにはソーセージもあり、その際は子どもたちも一緒に枝を取ってきて子ども自身がナイフで先をとがらせてソーセージにさす。焚火のできる場所がいくつもあり、いろんなところで使えるようになっている。また室内ではよくキャンドルをとす。特に暗い冬の期間にはキャンドルの灯りはとても居心地の良い雰囲気を作る。

2) 野外での飼育 ここのこども園（ここの園長は二つの園を経営している）ではどちらも動物を飼っている。ベルグリー家族こども園ではウサギとニワトリ、スチューアストレーン農場子供園では馬と羊がいる。子どもたちはエサやりをしたり、卵を取ったり、春には羊の出産に立ち会ったりもする。そこではどのように羊が生まれてくるか、また羊舎が出産場所として使われることを子供たちが体験できる。その後子羊が大きくなってからは世話をしたり、抱いたりもできる。羊は10月から4月の間羊舎でくらす。また子どもたちは馬に乗る体験もできる。馬はこども園が所有し、羊は隣の羊農家が所有している。

3) 親が保育活動の評価に参加する形態 私た

ちのところには保護者会があり、園児の保護者は自動的に入会するようになっている。保護者会は一人リーダーがおり、必要な時に会議を開く。そこでは保護者がいろんな議論をしたり、こども園についての質問などを取り上げたりする。私たちは年間計画を毎秋に提案し、ホームページに載せる。そして保護者はそれを読み、内容についての提案があれば、保護者会で取りあげる。最終的には保護者代表と、保育者一人、そして園長で年間計画を決定する。私たちはまた利用者アンケートや二者面談などで、保護者からの考えや意見などを聞く。また毎月発行する保護者への手紙の最後に、こども園の活動についての賞賛と批判の両方を歓迎しますと書いている。またフェイスブックで非公開のグループを作り、保護者が園での活動について内容を把握できるようにもなっている。

4) 安全管理 こども園には火災や事故、行方不明や病気に関する防災教育の資料集があり、1月と8月の計画を立てる日に再確認をする。また園では、児童福祉への登録に関する法律や規則についてもお知らせしている。そのほか、清掃や遊具、救急箱のチェックリストもある。また人命救助のコースを毎年受ける保育者もある。もちろん車の運転の際は、子どもたちもシートベルトをする。乗馬をする際は常に大人が二人付き添い、外へ出かけるときは、子どもの名前前のリストを持参し頻繁にチェックする。歩いていく際は、先頭と最後尾に大人が付く。こども園には日誌があり、そこには毎日誰が出席して欠席しているか記入する。外の遊び場にもチェックリストがあり、子どもの確認をしている。海や湖へ出かけるときは、十分な数の保育者が付き添い、例えばボートや栈橋など落ちた際に足がつかないようなところでは、救命胴

衣をつける。

5) 保育内容への参画 こども園では、毎日の活動を子どもたちが決めている。特に自由遊びでは、自分の好きなことができる。また子どもたちの考えやアイデアからプロジェクトを始めたりもする。昨年始めた多才な子どもプロジェクトは、特に自然現象に興味を持つ子どもの質問から始まった。このプロジェクトはとても良かったので、来年度も続けていく予定である。また、年長の子どもの一対一の懇談会を行ってこども園での日常について意見を聞いたりする。また朝の集まりでは、子どもたちから何の歌を歌いたいかやどの本を読みたいかなどの声を聞く。

6) ドキュメンテーションの活用 園での日常の様子を写真やビデオに毎日とっている。いつもと違うことをするときには特にそうである。これらは園のフェイスブックのグループ内に短いテキストとともに掲載し、保護者や保育者がみられるようになっている。また毎月園からのお便りを作成し、そこにはもっと詳しい情報を書ける。また園のホームページには、私たちが何をしているか、どのように園を運営しているか、また興味のある人は年間計画や写真などが見られる。

子どもたち一人一人にリングファイルがあり、そこには絵や作品などを挟んでいく。時々には写真もはさむ。このファイルは小学校に上がる際に家に持ち帰る。また最年長児は入学準備専用のファイルがある。ここには入学準備に行く様々な活動（例えばアルファベットを書くなど）の用紙を挟んでいく。また園の中には子どもたちの作品を飾っている。

おわりに

ノルウェーのストード市（南西部のストード島に位置する）で、二つの私立こども園を視察した。今回の視察調査では、以下のことが指摘できる。

1) スウェーデンと同様、子どもの権利条約を土台とした保育制度が浸透しており、両国とも約1：5の割合で子どもは保育者からの関わりを受けて教育及び養護の面で成長発達を支援されている。

2) 野外保育を中心とする園では、9月から4月の秋から冬にかけて毎日野外で焚火をして食事を作っている。動物との触合いや飼育体験、卵の孵化の体験、様々な穀物でのパン作り、ゴミから製造した腐葉土を使い、種から育てるなど一連の食農保育を実践している。また、自然の中での安全性を確保した上での、挑戦的で大胆な体験も行う。

3) スウェーデンと同様に、園の周囲には遊び

に適切な自然環境があり、1歳児から5歳児まで野外中心の保育を展開する実践がある。ほとんどが異年齢縦割り保育であり、同年齢クラスはほとんどない。1～4歳や1～5歳クラスで1グループ10～15人ぐらいで活動している。防災教育の研修も行われている。

4) スウェーデンと同様に、子どもたちのアイデアから始まるプロジェクト保育が導入され、ドキュメンテーションを通して子どもや保護者の参画が意図されている。保護者会も保育課程の決定において機能している。

主要参考文献

- 1) 杉山浩之（2018）「乳幼児期の環境教育の研究～スウェーデン型自然保育『ムッレ教育』をESDの視点から分析する～」(『広島文教教育』第32巻2017、pp. 47～64所収)。
- 2) ノルウェー「こども園保育要領」(Framework Plan for Kindergarten、2017施行)。 <https://www.udir.no/globalassets/filer/barnehage/rammeplan/framework-plan-for-kindergartens2-2017.pdf> (2018年5月20日閲覧)



スチュアストーリー子ども園 1
近隣の森の中での朝の会



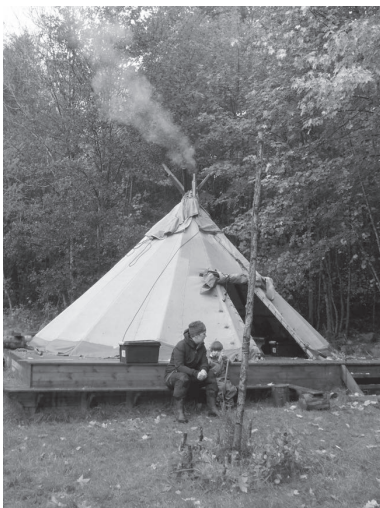
スチュアストーリー子ども園 2
火の環境づくり



スチュアストーリー子ども園 3
ナイフ使用の機会保障は子どもの人権である



スチュアストーリー子ども園 4
森の中の海賊船



スチュアストーリー子ども園 5
テント内で炊飯